

=私の九十年の歩み=

菱本久美郎



東京大学医学部 昭和 33 年卒業

東京大学大学院生物系研究科第三臨床医学専門課程（外科学、脳神経外科学）

博士課程 昭和 38 年修了

本稿は、令和 5 年(2023)9 月の東京大学医学部外科第一講座開講 130 周年記念誌に投稿した回顧録、[私の 90 年の軌跡]に補筆し、[私の九十年の歩み]と改題したものです。

[生い立ち]

①出生、幼時期歩み

父、菱本賢治（旧姓村井）は明治 34 年(1901)生まれ。奈良県生駒郡の郡長（勅令官）、村井勝治の息子。母の村井カツ、妹の村井（小中）千代と一緒に大和郡山城内の柳澤藩御殿で育った。医学の道を志して受験勉強中、父親が突然脳卒中のため死去。医学部受験を断念し、旧制の大阪高等工業専門学校（大阪大学工学部の前身）応用化学科を卒業。白線の入った旧制高等学校の学生帽と学生服姿で、硬球テニスのラケットを持って立つ細身の父の小さいスナップ写真が遺っている。父の青年時代を偲べる只一の写真。昭和初期の大恐慌、就職難の時代に、幸い大紡績会社（東洋紡）に就職した。

母の菱本幾代は、明治 40 年（1907）の生まれ。京都伏見の酒造業、資産家菱本恒次郎の 3 女。ぼくは、父が勤務する名古屋、大曾根工場の社宅（名古屋市東区矢田町）で、昭和 8 年（1933）12 月 29 日に誕生した。当時は、産婆さんが産婦の自宅で赤子を採り上げるのが普通の慣習（しきたり）。ぼくは一人っ子で、両親、祖母、女中たちに大切に育てられた。満州事変、満州国建国、日本の国際連盟脱退の時代である。

父が大阪本社へ転勤したので、2,3 歳のころ大阪の吹田市垂水に転居した。物心付いたのは 4、5 歳頃の支那事変の最中。首都南京陥落の賑やかな提灯行列（昭 12・12・14）と、枚方の陸軍火薬庫大爆発（昭 14・3・1。29 回に及ぶ恐ろしい爆発。死者 94 名、負傷者 602 人、家屋の全半壊 821 戸）など、よく覚えている。火薬庫の爆発は、夕暮れ時から翌日まで絶え間なく続いた。父は出張中で不在。あまりの恐ろしさに布団をかぶって、一晩中母にしがみついていた。

②小学生時代（戦時下の銃後生活と満洲への移住）

昭和 14 年(1939)の春、父の転勤で兵庫県姫路市保城に転居、市立水上幼稚園に入園。この年、ソ満国境（外蒙古）で起こったノモンハン事件（日露間の国境紛争）で、祖父菱本恒次郎の異母弟、菱本長次氏（日本の朝鮮総督府高官、朝鮮米の研究者）の長男・禮一さんが、満洲国興安北省新巴爾虎左翼旗で戦死（昭 14・8・24）。翌年、追悼記念誌〈ホロンバイルの華〉を父親の長次氏が執筆、刊行した。

昭和 15 年は、皇紀 2600 年の紀元節（1940・2・11）大祝賀の年。〈金鶏輝く日本の栄えある光 身に受けて、いまこそ祝へこの朝（あした）、紀元は 2600 年 ああ一億の胸は鳴る〉
[伝承の神武天皇即位年、西暦紀元前 560 年が日本の歴史の肇と、米国の世界年鑑にも記載]
この年、姫路市立水上小学校に入学（昭 15）、国民学校令発布（小学校を国民学校と改名、昭 16）。水上国民学校 2 年生の時、大東亜戦争が勃発（昭 16・12・8）した。

ぼく達は、大日本帝国の銃後の少国民。富国強兵、忠君愛国、滅私奉公、鬼畜米英撃滅、一億玉砕の決死の覚悟で、昭和の軍国主義時代を懸命に生きた最後の世代である。

昭和 20 年(1945)の早春、戦禍と食糧難から逃れるため、満洲東洋紡績（株）吉林工場の工場長として、2 年前から単身赴任していた父を頼って、満洲国の吉林省吉林へ疎開することになった。3 月末、渡航は不運にも米軍の沖縄上陸作戦の前夜。敵艦載機による大空襲に遭遇し、関釜連絡船、興安丸（7079 総吨）は早朝、下関港を出港後まもなく触雷、大爆発。航行不可能になり下関港へ曳航された。

夕方、救出された我々乗客は、開通（昭 17）間もない関門海底トンネルを通過して、列車で福岡駅に移動。駅前広場で野宿後、翌日博多港に回航して来た臨時便の天山丸（7906 総吨）に、まだ薄暗い早暁、艇（はしけ）からよじ登って乗船。夕暮れ時に、ようやく無事に朝鮮半島の釜山港に着いた。姉妹船の崑崙丸（7908 吨）が、昭和 18 年 10 月 5 日に米潜水艦（ワフー号）の雷撃で沈没して、400 余名の犠牲者が出た事をずっとあと（戦後）に知った。

深夜に、釜山発。満洲の首都・新京行の超特急列車ヒカリ号の車窓に、ハゲ山に朝鮮鳥の群れ、残雪の単調な冬景色を眺めながら、一日がかりで朝鮮半島を縦断。豪華、快適な車中でまどろむうち、汽車は京城、平壤、新義州を経て、翌日深夜に鴨緑江大橋を渡って満洲国の安東駅着。明け方奉天駅を通過、正午過ぎに新京駅に到着した。夕方、京図線（新京一図們）に乗り継ぎ、哈達湾駅で下車。迎いのフォード車でわが家に到着した。哈達（ハータ）湾駅は、吉林駅の一つ手前の小さい地方駅。吉林市は、奉天（瀋陽）、ハルビンと並ぶ満洲屈指の歴史的大都市。
（註：京図線 新京～下九台～樺皮廠→狐店子→九站→哈達湾→吉林～敦化～延吉～図們）

満洲一の大河、松花江に沿う吉林市興隆区興隆町哈達湾地区は、浅野セメント（旧大同洋灰）、東洋紡（旧東洋精麻）、満洲製紙など日系企業が進出する一大工業地帯で、工場を中心に日本人のコロニーが群在。父が工場長を務める満洲東洋紡績（株）吉林工場は、柞蚕（さくさん、山繭）の絹糸工場。さらに松花江の対岸、吉林市竜潭にも満洲電気化学工業（満洲電化）の大工場が存在した。大都会の吉林では、戦時下の内地に比べて、はるかに高いレベルの文化生活を享受出来た。

昭和 20 年 4 月、吉林在満朝日国民学校に転入学（6 年生、11 歳）した。雪解けのせせらぎの音、迎春花（インチュンホア）の花が咲き、新緑の柞蚕山に美しいお花畑、街路に柳絮（柳花の綿）が舞う早春の満洲。連日の空襲と食糧難に苦しんだ内地とは別天地。平和な五族協和の恵みの楽園と思えた。けれども学校では、教練、手旗信号、モールス信号、支那語（中国語）など慣れない教科があって少々戸惑った。

大東亜戦の戦局急を告げる中、校庭は応招兵（新兵）の練兵場に転用されて、学校は7月初めに早くも夏休みに入った。昭和 20 年 8 月 6 日朝、広島に新型の特殊爆弾（原子爆弾）が投下されて、被害が甚大と日本のラジオ放送は伝えていた。8 月 9 日薄明の払暁、聞きなれない爆音の飛行機による空襲が吉林市内にあって、空襲警報のサイレンで防空壕へ避難した。市中心部の満人（満洲の支那人）街に若干の被害があったと聞いた。ラジオ放送で、ソ連邦の一方的な中立条約破棄と参戦、ソ連軍の満洲・樺太・千島方面への侵攻と、米軍による長崎への原爆投下を知った。

昭和 20 年（康徳 12 年）8 月 15 日、朝から雲一つない青天の真夏日。正午の玉音放送で初めて聞く昭和天皇の玉声、ポツダム宣言受諾、一億慟哭の終戦。数百万人の邦人たちが、遠く祖国を離れた異郷の地に取り残されることになった。鈴木貫太郎内閣に代わって東久邇宮内閣が成立した事をラジオは報じていた。数日以後、日本からのラジオ放送は受信出来なくなった。

③終戦後の満洲生活

昭和 20 年（1945）8 月 15 日の終戦後、ソ連軍の占領下で略奪、破壊、強姦、満人暴徒の襲撃に苦しんだ 8 ヶ月。翌年の春、ソ連軍の撤収後は中国共産党の八路軍や朝鮮人民義勇軍、蒋介石の国民党軍などが入れ替わって進駐して、国共内戦の戦場になった。

八路軍の駐屯時には、日本人住居の一部が接収されて共産党軍の兵舎に転用された。土嚢を積み上げた最前線基地の中で、爆弾、兵器、共産軍兵士と隣り合わせで生活した。武装した八路軍兵士の馬車に便乗して、吉林市の城内（吉林市旧市街）へたびたび遊びに行った。終戦後、日本人は汽車に乗れなかったため、交通手段は八路軍の荷馬車か、一里（4 km）の徒歩のみ。

昭和 21 年(1946)の 4 月末、共産軍の敗退が決まった日にも臨戦態勢の八路兵士と膝を並べて、軍用馬車の荷台で揺られて城内へ最後の買い物に行った。街では、満人たちが騒然とざわめいていた。かき集めて持って行った八路軍の軍票（占領軍が発行する戦時臨時の通貨）は、最早通用せず、何も買えずに帰って来た。〔註：流通貨幣は満州銀行券とソ連紅軍軍票〕

翌日は、共産軍総撤退の日。敗走して行く朝鮮人民義勇軍の中に、旧関東軍の日本人兵士が一人いた。半谷さん、福井県若狭の人。吉林市郊外のわが家へ数回訪ねて来て、身の上話を遺していった。〔終戦後、新京で武装解除。京図線の貨物列車で西方、図們方面へ移送される途中、吉林付近で徐行中の貨車から仲間と一緒に川に飛び込んで脱走。連れ立って吉林省敦化付近を逃走中、満人民家に宿泊したところ、深夜に不意討ちの夜襲にあった。激しい銃撃戦の末、自分一人がこの朝鮮人民義勇軍に救出された。今後どこまでも、この部隊と行動を共にする決意である〕と言っていた。もしも朝鮮戦争(1950～1953)で、北朝鮮側の人海作戦に彼が従軍していたら、運命や如何？ 因みに、朝鮮戦争での北朝鮮側兵士の死傷者数は、北朝鮮兵が 45 万人、中国人民義勇兵が 90 万人と言われている。

最後の日、別れ際に母は黙って手作りの弁当を手渡した。ぼく達は名残を惜しんで、いつまでも手を振っていた。今生の別れ。みんな泣いていた。「内地へ帰ったら自分のことを家族に伝えて欲しい」と、頼まれた両親は手掛りがないまま連絡のすべなく、50 年近く前に他界した。

戦後 78 年も経った令和 5 年(2023)の 9 月、家族の手掛りを探して福井県庁へ「尋ね人」のメールを送ってみた。10 月初め、福井県健康福祉部地域福祉課、保護・恩給グループより公用メールで回答があった。〈ご連絡拝受いたしました。ご依頼の内容については、個人情報であるため、情報提供いたしかねます。お力になれませんが、ご理解いただきますようお願いいたします〉(原文のまま)。

終戦後、僕ら腕白小僧たちは学校の授業、勉強がないのが嬉しくて、1 年間楽しく毎日気まま、自由に遊び回っていた。駐留する兵士の銃口を恐れず、ロシアのソ連兵、中国共産党の八路軍、朝鮮人民義勇軍、蒋介石の国民党政府軍の区別なく果敢に、文字通り無鉄砲に進駐兵士に接触、交流。外出出来なくなった大人たちの唯一の貴重な情報源になっていた。

翌年、昭和 21 年 3 月突然、朝日国民学校で吉林中学校の入学試験があった。久しぶりに見たる教室は避難民で一杯。中学校に合格しても、入学式、通学、授業など一切無い幻の学校だった。校舎もなかった。(註：終戦まで五年制の旧制吉林中学校は実存)。6 月末、中国国民党中央軍の占領時代に、無蓋、有蓋の貨物列車を乗り継いで邦人の引揚げ開始。奉天と錦州の日僑引揚げ者収容所での難民生活を経て、米軍の引揚げ船で葫蘆島（遼寧省）から内地に帰還した。

引揚船に乗る時、許可された持ち物はリュクサック一個と現金 100 円のみ。長崎県佐世保の引揚者収容所でひと月余り隔離、収容されて、検便、DDT の全身散布、各種の予防接種等の防疫処置を受けた。9 月初めに京都市伏見区両替町（戸籍謄本上のぼくの出生地）にある母の実家に辿り着いた時は、満洲吉林市のわが家を出てから 3 ヶ月が経っていた。

あの歴史の大転換期に、終戦の 5 ヶ月前まで内地で銃後の厳しくひもじい生活を体験。その後 1 年半とは言え、多感な少年時代を動乱の満洲野（ますの）の大地で、戦争末期と終戦直後の激動、苦難の時代を生き抜いて帰国できたことは、何物にも代えがたい貴重な人生経験だった。

④京都府立桃山中学、高等学校時代

昭和 21 年（1946）9 月、特別の優遇措置のより名門の京都府立桃山中学校に編入学できた。小学 6 年の 2、3 学期と中学 1 年の 1 学期、合計 1 年間のブランク。中学校へ通うのが初めてのぼくは授業について行けず、期末試験成績は学級 46 人中 46 番。まさかの最下位。一念発起、猛勉強してこのハンディキャップを克服。点取り虫、がり勉の汚名が嫌なので、専ら自宅に籠って独り一生懸命、秘かにコツコツ自習。3 年生の学年末には、学級 1、2 位。府立桃山高校の成績は、学年 2、3 位を競うまでに向上した。因みに、中高 6 年間を通して常に首席だった西村史朗君（内科開業医の次男）は、東京大学理学部で天文学を専攻し、東京天文台の名誉教授。

京都大学の教養課程（昭 27、昭 28）を経て、昭和 29 年ストレートに東京大学医学部に合格した。京都大学から一緒に受験した高校 3 年同級の秀才、高須俊明君（耳鼻科開業医の子息）も合格した。二人とも学習塾や進学塾、家庭教師などのお世話になった事は全くない。勉強は一切の雑念を捨てて自習、一心不乱に自助努力、独り自力で頑張るしかない。まさに、神は自ら助くるものを助く（サミュエル・スマイル）である。

そもそも、<塾は、受験に失敗した落第坊主が行く所>、<家庭教師は、過保護な落ちこぼれ子女を教えるバイト学生、もぐり教師の末裔>と言うのが、ぼく持論である。リュクサック一つを背負って、命からがら帰国した貧しい満洲引揚者一家に、無駄な余裕はない。因みに、東京大学のクラス会誌に、〈シヨパンを聞き、夢見る坊ちゃん少年〉という趣旨の人物評価の記事がある。誰が書いたものか？ 鋭くこわい評価。感心した。

[東京大学第 1 外科入局と東大大学院進学]

昭和 33 年東京大学医学部を卒業。1 年間のインターンを終えて、昭和 34 年医学部外科第 1 講座、すなわち清水健太郎（昭 4）教授の清水外科に入局。入局者は、金沢暁太郎、高倉公朋、早川勲、平野勉、三宅浩之君と私の 6 名。入局と同時に、東京大学大学院、生物系研究科第三臨床医学専門課程（専攻：外科学、脳神経外科学）に 4 人が進学した。

もともと、第1外科の大学院生定員が3人のところへ4人が受験。目覚し時計が不調で、小1時間遅刻した私も含めて、奇跡的に受験者4名全員（早川、菱本、金沢、高倉）が合格した。

当時、東京大学医学部では、第1外科講座は清水健太郎教授を筆頭に石川浩一（昭14）助教授、草間悟（昭20）講師、林四郎（昭21）講師、上垣恵二（昭21）講師。脳神経外科は佐野圭司（昭20）助教授、喜多村孝一（昭21）講師、桑原武夫（昭26）講師、中村紀夫講師（昭27）などで構成されていた。清水教授が、外科と脳神経外科の教授を兼任（清水外科）。外来、病室ともに、外科と脳神経外科の区別なく交代で勤務した。

大学講師、講座助手と輪番制の病院助手（東京大学文部教官）を除いて、医局員数十名が「一日24時間勤務の無給研究生」。〈嫌なら、あしたから来なくてもいいんだよ〉と言う冷酷な決まり言葉が、当時の大学医局で普通に罷り通った時代。大多数の医局員は、禁断のアルバイト収入で、細々と糊口をしのいで生きていたのが実情だった。

第1外科入局当初の医局長は、中塩兼雄先生（昭16）から四方淳一先生（昭25）に交代。新人の仕事始めは、大羽善雄（昭23）土屋周二（昭23）、佐藤東芳（昭23）、川瀬貞臣（昭24）、古谷寛（昭25）など大先輩のネーベンでスタート。出張病院は、国立三島病院（白土進：昭24）、虎の門病院（筑紫清太郎：昭13）、関東労災病院（三木輝雄：昭16）、東京労災病院（近藤駿四郎：昭6）など、多くの第1外科大先輩にご指導戴いた。以上の諸先輩方に加え、橋爪敬（昭26）、磯野健太郎（昭25）、小松邦彦（昭19）、高橋澄（昭18）の諸先生にアルバイト先の病院、医院でお世話になった。いずれの先生方も既にご他界。改めて感謝の誠を捧げ、ご冥福を祈ります。 南無阿弥陀仏 南無阿弥陀仏 南無阿弥陀仏

[大学院生と岩垂奨学金]

大学院生のぼくは、昭和37年に[岩垂奨学会]の[岩垂奨学金]を受給。基金から毎月、返済不要の奨学金をいただいた。謝恩会で隣に着席したのは、電算機関係の女性研究者だった。源氏物語にはまっぴらで、宇治十帖の古跡巡りを終えたばかりだったぼくは迂闊にも、「コンピュータ解析によると、宇治十帖は紫式部の作ではないと言う説があるそうですね」と突然話しかけた。彼女は当惑したのか無言。場違いなことを言った様な気がして、口をつぐんだ。

私が何故、奨学金の受給者に選ばれたのか？ 長年ずっと謎のままだった。ごく最近になってグーグル、ウィキペディアなどで検索したところ、〈公益財団法人岩垂奨学会の奨学金は、工学系、理学系、医学系及び薬学系研究科に在籍する大学院学生のうち、学力優秀、健康、志操堅固であって学資支弁の困難なものに対して贈られるもの〉であることを知った。いささかうしろめたく、照れ臭く、恐縮して納得、感謝した。本当に有難うございました。

〔岩垂奨学会〕によれば、奨学会は令和 6 年 3 月 15 日に創設 90 周年記念を迎える。創設者の岩垂邦彦氏（1857～1941）は、安政 4 年九州、豊前豊津（福岡県京都郡みやこ町）の生まれ、工部大学電信科（東京大学工学部の一前身）を卒業。米国でトーマス・エジソンの施設で通信関係の仕事をしていたが、帰国後に日本電気（株）（NEC）を設立。岩垂家は、万有製薬など大企業に関連する華麗な名門財閥の一族であることを知った。

令和 5 年 8 月、私は岩垂奨学会創設者のお孫さん、現理事長の岩垂秀一氏と直々に E メールで交流できた。理事長によると、昭和 9 年創立以来令和 3 年までの 87 年間に、東京大学、京都大学、名古屋大学の大学院生、2700 余名が岩垂奨学金の給付を受けている。東京大学医学部で同級だった大学院生も、高倉公朋（脳外）、風祭元（精神科）、諏訪城三（小児科）の諸君が岩垂奨学金を受けていた事が判明した。

〔外航船の船医、東南アジア・インド旅行〕

当時、清水外科では新入局者に船医を経験させる長年の慣習があり、我ら新人 6 名のうち 3 名が乗船した。躊躇する者が多い中で、私は率先して一番に志願した。私が東南アジア・インド航路の外航船、カムチャッカ沖の蟹工船が高倉君、アリューション沖のフィッシュミール船（魚粉肥料加工船）が早川君と決定した。

私が乗った船は、日産汽船（株）が北洋水産（株）からチャーターした六千噸級の貨客船の白根山丸。昭和 34 年（1959）の 11 月早々、先輩、同僚たちに見送られて横浜港を出航。翌年 3 月帰還するまでの 4 か月間、臨時の船医を務めた。一般日本人の海外渡航がまだ解禁されていない時代の珍しい海外旅行。始め外洋に出て暫く激しい船酔い、嘔気と嘔吐に苦しんだあとは、総じて順調で楽しい船旅であった。

船は横浜港を出港後、清水、名古屋、大阪、下関港などに入港して積み荷。香港、シンガポール、マレーシアのペナン島（蛇寺、極楽寺観光）などへの寄航。12 月にスリランカ、セイロン島のコロombo 港に入港し、長期間碇泊して年を越した。内地は極寒、雪の師走。こちらは陽光輝く熱帯、亜熱帯の美しい緑の楽園。楽しい観光（仏教、ヒンズー教、回教の寺院巡礼、動植物園巡り）、美食、買い物（宝石商、土産物店等々）三昧の 1 か月だった。

因みに、船は船長、機関長、航海長、通信長、医師、司厨長、事務長を始め、航海士（1 等、2 等、3 等）、通信員、甲板員、機関士、操舵手、操機手、調理師、給仕、ボーイ長・ドバス（見習、便所係）などから成る高度の専門的階級社会。乗組員は男性 60 名。船医助手は第 3 航海士の役目。船員は下船時以外、航海中は船内に半拘束同様。乗組員の家族面会は、国内寄港先の港でのみ。家人は港の旅館に宿泊し面会する。外航船は外国の港に入港時に国旗を掲揚、

入港中は領海外との通信禁止。乗組員はパスポート、査証なしで、寄港地の出入が自由。船乗りは、陸（おか）に上がって地上勤務、或は転職を希望する者が少なくない等々、初めて知ることが多かった。

昭和 35 年(1960)の正月早々にコロombo港を出港し、インド亜大陸西岸のアラビア海を北上。インド西北部のグジャラート州カッチ湾に向かって航海した。インドの西海岸を航行中、高齢の司厨長が突然大量吐血。ショック状態に陥り、最寄りのインド第 2 の大都会、ボンベイ（ムンバイ）の港に緊急寄港し救急入院させた（肝硬変末期の食道静脈瘤破裂）。救急病院へ行く途中、市内を一周して見物した。巨大なインドの門、ヒンズー教の沈黙の塔、美しいマリンドライブなどが記憶に残る。立ち寄った船会社の代理店では、知的なインド青年たちが仕事に真摯に没頭。近代化したインドのビジネス界を垣間見て驚いた。

船には、他に重症の患者はなく、船長、機関長に連れ立って気楽に観光と買い物を楽しむ快適な船旅だった。ただ、香港島から南下し、南シナ海、シンガポール経由でマラッカ海峡、ベンガル湾、インド洋、アラビア海、ペルシャ湾まで、赤道直下の大海を往くこの旧式 S/S 老朽船には冷房設備が全くなく、連日連夜、熱帯の猛暑に苦しんだ。これ以上の炎熱は、原子炉、火葬炉、地獄の釜を除くと、現世にも来世にもそう多くないのではと想像した。

船旅の終着地、カッチ湾の奥にあるベディ・バンダーは未知の地。インド・ムガル帝国時代からの大都市、グジャラート州ジャムナガールの外れにある広大な海岸地帯だった。海も陸も硬い天然塩で覆われ、波打ち際、地平線、水平線まで真っ白な一面の銀世界。人影なく緑の樹木もなく、殺伐、荒涼とした塩、また塩の風景。この世の最果ての地と思えた。船は接岸せずに、沖合に数日間碇泊。船倉満杯に、天然塩を積み込んで帰路についた。シンガポールと香港島に寄港後、下関経由で徳山港着（cf 徳山ソーダ）。ここで積荷の塩を下ろしたあと、神戸港と大阪港に立ち寄り、3月初め無事に横浜港に帰港した。

終戦の翌年、昭和 21 年秋に米海兵隊の LST 型揚陸艦で、満洲の遼寧省葫蘆島から九州佐世保港に引揚げて以来、13 年ぶりの船旅。自助、自立の精神と不屈の体力を養うには、滅多にない貴重な試練の 4 ヶ月であった。チャンスがあれば、またいつの日か船に乗って遠くへ行きたい。波濤を越え、遙々遠い未知の世界を訪ねることは、無限のロマンと冒険。地球一周の船旅に出ることが目下の夢である。ヒトの一生は、大海を漂う船旅のようなものだと思う。

一方、カムチャッカ沖の蟹工船、ベーリング海のフィッシュミール船に乗った仲間の体験談によると、波高く極寒の北氷洋上での生活、勤務の厳しさは想像を絶するものだったという。小林多喜二の小説〈蟹工船〉の苛酷な世界を連想した。 [東大第 1 外科清水健太郎教授時代]

[清水外科から石川外科へ]

昭和 38 年、清水健太郎教授が定年で退官。脳神経外科学教室が独立して佐野圭司教授、外科第 1 講座は石川浩一教授（石川外科）。昭和 34 年度入局者 6 人のうち、一般外科・消化器外科の石川外科が 3 名（金沢、菱本、平野）、脳神経外科が 3 名（高倉、早川、三宅）に別れた。この年 3 月、清水外科教室最後の博士号が、大学院 4 年課程を修了した金沢、高倉、早川、菱本（29 歳）の 4 名にも授与された。

私の学位（医学博士）論文は、「腫瘍細胞のライフサイクルのなかでアルキル化剤に特に弱い時期について」。即ち、トリチウム・チミジンでラベルした腫瘍細胞にアルキル化剤系抗がん剤を投与してオートラジオグラフィ法で追跡した研究。（日外会誌 66：菱本久美郎、1151-1563、1965）

第 5 回日本癌治療学会（1967、名古屋）では、「レーザービームによる皮膚扁平上皮癌の治療」という演題で、斬新な研究発表をした。東京大学医用電子施設（渥美和彦：昭 29）のルビーレーザーの 1 号機を初使用。私が提供した第 1 外科の症例、下腿の扁平上皮癌にパルス照射を試みた症例報告。本邦初のレーザー光による癌の治療（レーザー臨床応用の嚆矢）として、発表当日の夕刊紙を飾った。この詳細は、菱本久美郎ほか：臨床外科 24（6）811-817、1969 に掲載されている。

[第 1 回米国留学 ポストン・タフツ大学大学院]

関東労災病院に出張、勤務中、図書室の書架にあった米国の外科専門月刊誌〈ANNALS OF SURGERY〉に、動物腫瘍のレーザー治療論文(1963)を発見し、先方へ私どもの研究を手紙で紹介した。これがきっかけで、米国ポストンにあるタフツ（TUFTS）大学の大学院博士課程に留学することになった。一年上級、4 歳年上の北海道大学心臓外科の講師、田邊達三先生（のち教授、病院長）と、研究室で机を並べて留學生活の苦楽を共にした。

R.Detering 教授（心臓・血管外科医）の教室で、Harry S. Soroff 准教授（のちテンプル大学教授）の外科研究室にレサーチフェローとして配属された。所期の希望に反して、研究テーマは臓器移植と移植生物学。レーザー研究者（Dr. P.E. McGuff）はすでにポストンを去り、テキサス州で開業して不在。レーザー装置は故障してお蔵入りと聞いた。

私の新しい研究課題は、＜リンパ球の混合培養による組織適合性検査＞の研究。この TISSUE TYPING 法で有名なカナダ、マクギル大学のバーバラ・ベイン 博士に学会で会うことが出来た。リンパ球、免疫細胞の培養実験を繰り返し、MIXED LEUCOCYTE CULTURE FOR HISTOCOMPATIBILITY TEST と題した一遍の小論文を作成した。

アトランティック・シティ（ニュージャージー州）の外科学会、ニューヨークの第7回国際移植学会(1966)などに出席。学会発表の演題は、移植生物学、免疫学、組織適合性検査法など極めて難解、超基礎的なテーマが主で、臓器移植、臓器保存など外科医が待望する発表は稀有だった。大学医局の菅原克彦講師（昭23）から学会印象記を書く様に勧められた。その記事は移植専門誌、[移植]の創刊号1:70-76(1966)に掲載されている。臓器移植を志す日本の外科パオニアたちは、私の学会記事を読んでさぞかし困惑したに違いない。

当時の米国ボストンには、鉄門倶楽部（東大医学部同窓会）関係の留学者も多く、マサチューセッツ工科大学（MIT）でDNAポリメラーゼ研究中の横野靖（昭33、1内）、ハーバード大で脳腫瘍の礬素中性子捕捉療法を開発中の畠中坦（昭32、脳外）、マサチューセッツ総合病院（MGH）の麻酔科レジデント諏訪邦夫（昭36）先生などと親しく交流した。

一緒に旅した名所旧跡は、アメリカ独立戦争のコンコード・レキシントンの古戦場、ポースマスの日露戦争講和条約締結の軍港内記念館、清教徒が上陸したプリマス港、メイフラワー号（復元）、マサチューセッツ植民地(復元)、メイン州のインディアン集落、ニューポート、ナイアガラ瀑布、ハーバードなどアイビーの諸大学、MIT、ブラウン大学、メドフォードのタフツ大学本校、シラキュース、オタワ、トロント、モントリオール等の諸大学。

また、フィラデルフィア、ニューヨーク、ワシントンなど米国東海岸の数々の大都市、マサチューセッツ、コネチカット、ニューヨーク、ニュージャージー、ペンシルバニア、メリーランド、ロードアイランド、ニューハンプシャー、バーモント、メインなど東部の諸州を歴訪した。ニューハンプシャー州の片田舎で、日本語が全く通じない日本人のウェイトレスの少女が一人寂しく働いていたこと等々、特にニューイングランドとカナダ旅行の思い出は尽きない。

東京大学からイエール大学大学院に留学していた京都府立桃山高校時代の同級生、池上嘉彦君をコネチカット州ニューヘブーンに尋ね、久しく歓談した。彼は現在、東京大学の名誉教授（英語学）。また、ボストン市の中心部、ハリソン街にあるタフツ・ニューイングランド医療センターの外科研究室に、林四郎先輩（昭21、信州大学外科教授）が米国旅行中に立ち寄られた事、三木輝雄先輩（昭16、関東労災病院副院長）とフィラデルフィアの国際外科学会で再会した事なども懐かしい思い出である。両先生ともすでに故人。

[東回りの地球一周旅行で帰国]

米国からの帰路は東回り。ボストンから空路大西洋を越えてロンドン、コペンハーゲン、パリへ。パリでは、フランス留学中の北条慶一（昭34）後輩と再会。一人でジュネーブ、チューリッヒを観光したあと空路、ソ連占領下で陸の孤島になっているベルリンに到着。西ベルリンで、

ベルリン自由大学に留学中の東大清水外科元医局係の若い女性、通称ペコちゃん（相撲力士の娘さん）に迎えられた。このペコちゃんの案内で、空爆廃墟のカイザーウィルヘルム記念教会、ベルリンの壁、ベルリン自由大学など未だ戦禍の爪痕が残る西ベルリンを一周訪問。

ソ連占領下の東ベルリンでは、ウンテルデンリンデン街、巨大なソ連の戦勝記念塔、戦火でくすんだ国立ベルリン美術館など、戦後復興の遅れている東独の街並みを観光バスで巡った。ブランデンブルグ門東側の検問所では、自動小銃（チェコ小銃、通称マンドリン）を構えたソ連兵から厳重な身体検査と旅券・所持品の検査。バスの車体下まで執拗なソ連兵の点検、探索を受けた。'ДАВАЙ! ДАВАЙ!'（ダワイ、ダワイ）と大声のロシア語の蛮声。

終戦後の凶悪、獰猛なソ連軍の満洲占領時代を思い出して怖かった。深夜の荒涼たる満洲の空の下、高粱畑に身をひそめる日本人避難者の群れ。突然、ソ連軍の装甲車のエンジン音が停止し、ロシア語の大罵声。ДАВАЙ、ДАВАЙ! МАДАМ ДАВАЙ!〈出てこい、出てこい! 女ども!〉ソ連兵に姦されて吹雪の大晦日の夜、自決した不憫な女性もいた（凍死）。

西ベルリンでは、上記のペコちゃんの口利きで明治初期の東京帝國大学内科教室の祖、ベルツ教授（ベルツ水で有名）のお孫さんの好意で、ホテルに無料で宿泊出来た。林四郎先輩（昭20）も東京大学第1外科助教授に在籍当時、ベルリンでこのペコちゃんの世話になったと聞いた。

ベルリンから空路、フランクフルト着。高校時代からの親友、下店栄一君の出迎えを受けた。数年ぶりの再会。航空会社のスチュワーデスと言う若い美人の日本人女性が畏まって随行していた。車でゲーテハウスなどを一緒に訪問、古都ハイデルベルク城観光とハイデルベルク大学視察。夜は、彼の住居であるヴィスバーデンの米国駐留軍基地内の宿舎で歓談し、宿泊した。

因みに、この下店君は京都府立桃山高校の同級生。京都大学哲学科を卒業後、フルブライト留学生として米国の南カリフォルニア大学に留学。ドイツのマインツ大学で認識論哲学を専攻して哲学博士。のちに南カリフォルニア大学の教授、大学の理事を歴任した偉才である。私の訪問当時は、在ドイツ米陸軍基地内にある米メリーランド州立大学分校で哲学の講師。10年後、彼が一時帰国した時に東京で再会。

さらに数年後、ハワイと米国東海岸を私用で小旅行した際、ロスアンジェルス郊外の別荘地 RANCHO PALOS VERDES にある彼の自宅に3泊した。あいにく、カリフォルニアの全交通機関がストライキ中で、旅行はままならなかった。帰途は、時間つぶしにハワイ島とマウイ島を周遊。ワイキキ・アラモアナビーチで、ゆっくり真冬の海水浴を満喫して帰国した。

あの欧州旅行は、今から 50 数年も昔、日本人旅行者にはまだ滅多に出合わない大昔に、英語の小ガイドブック一冊を片手の一人旅。フランクフルトからハンブルク、ウィーンを観光。飛行機でアルプス山脈を越えて、ニースに宿泊し、コートダジュール沿いにモンテカルロへ。更にバチカン、ローマを観光してからエジプトへ。カイロ、ギザ、アテネと周遊。ピレウス港からサラミス島、エギナ島へのエーゲ海クルーズでは、船内で豪華なファッションショー。島々では、ギリシャ神殿の遺跡巡り、太陽の光煌めく群青のエーゲ海で爽やかな初秋の海水浴を楽しんだ。

エジプトのカイロでは、クレオパトラ・ホテルに宿泊。エジプト考古学博物館で、数千年以上も大昔の異次元的なエジプトの神々の石像、王族・貴族の無数のミイラ、ヒエログリフの石碑、オベリスクなどに囲まれ、ツタンカーメン王の黄金マスクとも対面。ホテルのレストランで猿の脳みそ料理を試食。ギザではラクダに乗ってスフィンクスとクフ王のピラミッドを背景に記念写真を撮り、灼熱の砂漠でピラミッドに途中までよじ登るなど珍しい体験が多い。

カイロからニューデリーを経て、空路バンコク着。黄金仏、エメラルド仏が輝く数々の華麗な大佛教寺院巡り。香港島では、小一時間かけてデートスポットのビクトリアピークを一周し、香港島・九龍半島の東洋一真珠と言われて夜景を久しぶりに俯瞰。香港の啓徳空港から台湾の桃園国際空港経由で、観光遊覧旅行 1 ヶ月余の長旅を終え、伊丹空港で父の出迎えを受けて帰国した。台北で買い求めた青丹色のエキゾチックなろうけつ染めの聖観音菩薩像は、2 回目の渡米時にオハイオの自宅の壁を飾っていた。持ち帰るのを忘れた事が心残りである。

[東大第 1 外科医局帰局 東京労災病院出張]

昭和 41 年(1966)に第 1 外科の医局に復帰し、第 2 回目の輪番制の東京大学文部教官助手。帰朝報告、外来診療担当、病棟医オーベン、学生講義、研究室勤務などで多忙な年であった。

この年は、昭和 34 年度入局者が医局忘年会の当番年。私以外に該当者は医局に不在だった。取りあえず、独りで雑巾がけの大掃除から始めたところ、河野信博(昭 36)、富山次郎(昭 37) 両先生をはじめ大勢の助っ人が現れた。お陰で、忘年会を盛大に催すことが出来た。終わりに胴上げされたこと、後日改めて渋谷で慰労会を開いたことなどを思い出す。

昭和 42 年、東京労災病院の近藤駿四郎院長(昭 6) から第 1 外科へ医師の招聘があった。近藤先生は第 1 外科の大先輩で、日本医科大学の教授を兼任。先生は本邦最古の伝統ある東京帝國大学第 1 外科の祖、近藤外科の近藤次繁教授(明 23) の御子息。昭和の初めに、当時としては珍しく米国留学歴があり、清水健太郎教授(昭 4) のライバル。清水先生もまた、米国留学中に戦争が勃発し、日米交換船で帰国したと聞いている。兩人共に、脳神経外科学を専攻。

当時の第1外科医局で、この近藤駿四郎先生と面識のある者は少なく、交流があるのは日本橋の三井不動産(株)医務室に勤務する10年先輩の加藤静男(昭23)先生のみと言われていた。この両先生には多数の共著(主に脳神経外科関係、特に頭頸部外傷)があり、その著作権争いが原因で二人の親交は当時すでに破綻していたことを後で知った。

東京労災病院へは、一年交代制の東京大学文部教官の任期を終えた私が、医局を代表して取りあえず様子を見に出張勤務することになった。昭和43年(1968)の春に初登院。初対面の近藤駿四郎院長は温厚、磊落で気さく、後輩思いの大先輩。過大な愛顧と轟頂を賜り恐縮した。外科には、東京大学第2外科出身の副院長志賀巖先生(昭20、草間悟、佐野圭司両教授と同学年)がおられ、数名の外科医が第1、第2外科の分け隔てなく協力して働いた。(外科副部長)

医局旅行で神奈川県小田原市二ノ宮にある二宮尊徳記念館を見学し、箱根を1周。近藤先生と一緒に温泉風呂に浸かって、裸で気さくに歓談した。東京中野の先生のお自宅に招かれて、ご馳走になったこともあった。奥さまとお嬢さんとの3人暮らし。居間には、岸田劉生の麗子像。庭は、外国で収集したと言う珍しい千種いっばいの美しい花園。

[第2回米国留学 オハイオ州シンシナティ大学外科]

東京労災病院外科に1年余り勤務後、昭和44年(1969)に再び渡米した。志賀巖副院長の東京中野のお宅で壮行会。荒れまくった大学紛争の最中、安田講堂の陥落直後に追われるように慌ただしく羽田空港を出発。ホノルルのハワイ出雲大社(宮王宮司)でブルメリアレイの祝福を受けて結婚した(35歳)。同行の知人、井上敬さんははじめ大勢の日系2世、3世(小森、田中、柳迫、大城さんファミリー)が結婚式に列席。アメリカ合衆国ハワイ州の方式により、昭和44年1月28日江崎桂子と婚姻。在シカゴ日本国総領事受付と、戸籍謄本に記録されている。

ホノルルからサンフランシスコ、シカゴ経由でケンタッキー州内にあるシンシナティ大空港(註:シンシナティはオハイオ州)に到着。空港で大学小児病院のレジデント、長尾大(昭36)先生の出迎えを受けて、大学構内の施設(アルテンハイム)に臨時に宿泊。まもなく大学研究室の同僚外科医、Edward Law先生の紹介で、先生と同じ豪華な高層アパート(屋内温水プール付き)[OAK MANOR](310 Oak Street, Cincinnati, Ohio)に落ち着いた。

この長尾先生夫妻に加え、医療センター放射線科のレジデント蜂谷順一先生(のち、杏林大学教授)夫妻、シンシナティ音楽院准教授の橋本先生(東京芸大出身のハープシコード奏者)一家(ミリー・パーキンス似の白人夫人とベイビーの3人暮らし)をはじめ、洋子さん(北海道出身)、はる子さん(大阪人)、シェリーよし枝(千葉・松戸出身)さんなど現地米人の妻たちとも家族ぐるみで交流した。

わが家に長男が生まれた時も、次々と来訪。わが家の揺籃は、誕生祝いの可愛い米国式プレゼント（カード、花飾り、人形、玩具など）で直ぐにいっぱいになった。クリスマスは、はる子さん夫妻宅で深夜まで楽しいパーティー。蜂谷先生は間もなくコロンビア大学へ転勤して、一家はニューヨークへ去った。

今も、グーグル画像で [OAK MANOR] の写真を懐かしく眺めている。50 数年前と変わらない思い出のわが家、美しいアメリカの大学都市の街並み。楽しかった日々を思い出すと感慨無量。アメリカンドリームの夢から未だ醒めていない化石少年のぼくは、2023 年の今も当時の米国車、シボレーカマロ（1969）に乗っている。

滞米中の昭和 44 年 4 月 4 日、東大病院中央手術部の高圧酸素療法用の密閉タンクの中で、元清水外科の 4 年後輩、明石勝興君（昭 37、脳外）が患者諸共に爆死した事件があった。定期購読していた邦字新聞 [ハワイ報知] の翌日版で知った。高圧酸素室内で、眼底鏡を不注意に点灯したのが大惨事の原因と報じられた。当時の現場は、「恐ろしくて説明できない。気絶した人、精神的に変調を来たした人、退職した職員もいた」と、帰国後に中央手術部の仲間から聞いた。第 1 外科の医局名簿には、ただ「東京都に於いて逝去」と記載されている。

こうして、1969 年からシンシナティ大学外科 (W.アルテマイア教授) に留学。私は、大学のレーザ研究所 (所長：レオン・ゴールドマン博士) の主席研究員に着任した。ゴールドマン教授は、前人未踏のレーザ医学の創始者、世界一の権威者。この先生を凌駕するレーザ医学者は未だいない。私の米国オハイオ州留学は、この大先生に直接手紙を出して実現したものである。帰国後も、国際学会 (1981、東京)、国際セミナー (1983、シンシナティ) などで再会。ゴールドマン教授は生涯を通じて、常に私の良き理解者、後援者。大恩師であった。

私がレーザ研究所に入所する前、外科の准教授 (Dr. J.P.フィドラー) がミッシヨナリーの仕事でアフリカのリベリアへ出向。代わりに私が彼のオフィスと研究室を預かり、レーザ物理学者の R.J.ロックウェル博士と共同でレーザとプラズマの外科的応用、生物物理学的研究に従事した。研究室のメンバーとは始めから相性がよく、毎日和気あいあいの楽しい研究生活。

レーザ研究所の研究助手の一人は、ベトナム戦場帰りの陽気な白人の GI、元米海兵隊衛生兵の Ron Dreffer 君。新婚でシンシナティ大学医学部に在籍中。医学の知識が豊富なのに感心した。他に、レーザ工学者の Bob Epstein、実験助手の John Johnson、レーザ電気技師の Richard Jung 等の諸君。病理組織学の Marilyn Franzen 女史、美人秘書の Mary Jo Kapokne 嬢ほか大勢の研究所の仲間たち。Mary Jo のカトリック教会での結婚式には、みんなで揃って列席した。

別に、アイルランド系の James Jim Ball という名の知的な青年世話係がいて助けられた。彼は何故か芥川龍之介作品の愛読者。文学青年？ オハイオ州の自動車運転免許テストに、即日合格したのも彼の援助のおかげである。ルビンシュタイン最晩年のショパン演奏や M. ポラーニのピアノ演奏会と一緒に聴いたことなど思い出が多い。この Jim 君は、十数年後に京都の我が家に来訪。家族と一緒に奈良と京都を観光。東大寺 2 月堂では、一緒に木魚を打って読経した。また、翌年タイ人の女医さん Dr.Achana Ball と結婚し、帰米の途中で再び京都へ立ち寄った。

この時期は、丁度チェコスロバキアの [ブラハの春] (1968)の直後で、ソビエト・ワルシャワ機構軍がチェコに侵攻し大動乱の最中。戦火を避けて来米した外科医の Naprustek 博士が研究室に逗留。西ドイツからもレーザ位相差顕微鏡の女性研究者が来訪するなど、レーザ研究所は国際色豊かに賑わった。後日この Naprustek 先生は、国際レーザ学会に出席するため来日。国立東京博物館で、中世仏画の地獄絵巻図の鬼が〈人間の舌を引き抜いたり、内臓を引きちぎるなど残忍な光景〉を見てびっくり。突然、(悪魔が、われわれ外科医と同じ事をしている)と言った。彼らしい巧みな即興の鋭いこのコメントに感服した。

私は、早々とレーザとプラズマに関して 2 編の英文論文と 1 篇の邦文論文を完成した。渡米半年目には、第 8 回国際医学生物工学会総会 (シカゴ、1969) で口演した。演題は、〈SOME TECHNICAL PROBLEMS IN PLASMA SCALPEL HEPATECTOMY〉。米カリフォルニアの BRAYSHOW 博士が開発したプラズマメスの試用経験を学会で報告したものである。

私の研究は、ゴールドマン教授の著〈LASERS IN MEDICINE〉、ロックウェル博士との共著〈APPLICATION OF LASERS〉に紹介されている。カリフォルニアの S.メイマン、タウンズらによるレーザの発明は 1960 年。その僅か 10 年後に出版された上記二冊の名著は、レーザ生物学・医学黎明期の永劫不滅の教科書、バイブル的な金字塔である。

なお、L. GOLDMAN, K. HISHIMOTO et al の論説、Nature 228 : 1344—1345(1970)の〈SOME PARAMETER OF HIGH OUTPUT CO₂ LASER EXPERIMENTAL SURGERY〉には、当時のレーザ研究所での私たちの研究活動が詳しく紹介されている。

私の英語論文 ① 〈LASER WOUND HEALING COMPARED WITH OTHER SURGICAL MODALITIES〉は、英国の外科専門誌 BURNS VOL. 1 (1975) : p p 13=22 に掲載。

また、論文 ② 〈PLASMA SCALPEL SURGERY : REPORT OF SOME EXPERIMENTAL EVALUATIONS AND INCIDENCE OF GAS EMBOLI〉は、BURNS VOL. 1 (1975) : pp128=134 に掲載されている。

邦文の論文 ①<プラズマメスとプラズマ外科>は外科診療 14(3)、1972 に、②<プラズマメスと無血手術—プラズマ外科>は、日本医師会雑誌 66(4)、1971 のステトスコープ 220 欄 (図版・解説) に紹介した。本邦初のプラズマメスの学術文献である。

シンシナティ大学に留学中の 1969 年の 7 月 16 日、米国の宇宙船アポロ 11 号の乗組員が月面に着陸。窓越しに遠く月を眺めながら、人類初の月面歩行の実況放送をテレビで見ていた。これも、今や遠い昔の思い出になった。

第 2 回目の米国留学を終えた私たちは、米国生まれの長男を連れて、ニューヨーク、マイアミ (フロリダ)、アトランタ (ジョージヤ)、ラスベガス (ネバダ)、ロサンジェルス、ホノルルを周遊して帰国した。旅の途中、この乳児が下痢と脱水で体調を崩したので旅程を短縮。サン・アントニオ (テキサス)、ニューオリンズ (ルイジアナ)、グランドキャニオン (アリゾナ) などへの旅程は、残念ながら中止。ハワイでは、結婚式に参列して下さった二世、三世の日系人と再会。ホノルルのベレタニア街にある日本料亭で一堂に会して、懐かしく歓談した。

日本に帰国後、ゴールドマン教授の推薦で国際連合の世界保健機構 WHO のレーザ安全会議 (1971、ダブリン) の国際委員に指名された。また、非電離放射線 (含レーザ) [NON-IONIZING RADIATIONS] の生体への影響調査と防御対策についての国際会議で、WHO の特別研究者に指定された (1985、1991、コペンハーゲン)。

東京大学医学部医用電子施設が主催した帰朝報告会は、超満員。僅か数名で始めた医用レーザ研究会は、近年、会員数千人の日本レーザ医学会に発展した。1981 年には、第 4 回国際レーザ医学会総会 (会長：渥美正彦東大教授) を東京で開催。米国の L ゴールドマン博士の基調講演があり、私もレーザ安全対策を主題に代表講演をした。 [東大第 1 外科石川浩一教授時代]

[東京労災病院外科]

米国から帰国後、まもなく東京労災病院外科に復帰した。(第 2 外科部長、中央手術部部長)。わが国では日立製作所がイスラエル・シャープラン社製のレーザメスを参考モデル機として入手。依頼を受けた私が、東京日立病院 (小松邦彦：昭 19、宮川静一郎：昭 30) で乳癌のレーザ手術を実演、披露したことがあった。(本邦におけるレーザメスによる乳癌手術の嚆矢)

米シンシナティ大学のレーザ研究所では、このシャープラン社の遠赤外線 CO₂ レーザメス、米国スペースレイズ社の高出力ビーレーザ、Nd-YAG レーザ装置などを使用していた (FIG 1) (FIG 2)。わが国でも、私の協力により 1970 年代初頭に医療機器メーカーのアロカ (株) 社が、本邦初の CO₂ レーザメスを完成した (FIG 3) (FIG 4)。

東京労災病院で、早速この1号機をいち早く臨床手術に導入した。同じ機種は、東京女子医科大学外科、国立王子病院外科にも納入された。これとは別に、持田製薬（株）が独自に開発したCO2レーザー装置があり、東京鉄道病院で滝沢利明先生（昭37、脳外）らが、脳外科手術に盛んに試用していた。

東京労災病院では、外科副院長の志賀巖先生の熱意ある協力下、東京女子医科大学の外科医師、外科研修医も加わり、レーザー手術の総件数は10年間で外科疾患500余例に達した。日本外科学会、日本臨床外科学会、日本レーザー医学会、国際レーザー医学会、日本ME学会などでたびたび研究発表をした。（FIG5, FIG6）
[東大第1外科草間悟教授時代]

昭和56年頃、近藤駿四郎院長が定年退職。近藤先生と長年対立、反目していた内科副院長の牛尾耕一先生（昭11、1内）が新院長に昇格すると、近藤元院長と私を「目の上のたん瘤」のように忌避、排斥。名誉院長室を、別館の倉庫裏の薄暗い小部屋へ追放。名誉院長の登院が遠のくと、攻撃の槍先は私に向かい、有形無形の執拗な圧迫、軋轢に苦しめられた。

労災病院では管理職医師が公費で、一回海外視察をする制度があり、昭和57年(1982)の秋に独りで欧州視察旅行に出かけた。アンカレジ周りでアムステルダム着。パリ、アテネ、マドリード、ローマなどの大学病院、国公立病院をつぶさに視察した。ついでに自前で、パリからベルサイユへ、マドリードからトレドへ、ローマからナポリ、ソレントへと巡回した

ローマでは、フォロロマーノ、コロッセオ、カタコンベ、パンテオン、カラカラ浴場、ローマの泉、スペイン広場、サンタンジェロ城など。アテネでは、オリンピック競技場、アクロポリス、パルテノン神殿など10数年前と変わらぬ旅行コースを一巡した。更にローマから、遠くヴェスヴィオ山を望むナポリの街、ポンペイのローマ時代遺跡、半島の岬町ソレントまで広く周遊した。黄昏時のソレントでは、街角の各所にローソクの燭火に揺れる可愛いマリア像が入った祠が多数鎮座していた。日本の小さい地藏堂が偲ばれて、旅情をかき立てられた。

ヨーロッパの各地では、昔来た時とは違って何処へ行っても日本人観光客が溢れていた。ビニール製の超高価な銘柄品を争って買いあさる女性団体客が多く、ブランド物と言う代物が世に存在することを、世事に疎い私は初めて知った。時まさに、バブル景気時代の幕開け。

アテネから、空路でギリシャ・ドデカネス諸島のヨハネ騎士団の島、ロドス島に移動、宿泊し、神殿巡りとエーゲ海での遊泳を楽しんだ。ロドス島と言えば、英国の作家、W.サマセット・モームの小説 [HUMAN ELEMENT]、邦語訳「人間の本質」の舞台。学生時代に、原著で読んだ記憶がある。

ヨーロッパ大戦中、派手で活発な社会貢献で名をはせた美貌の公爵家の令嬢がヒロインの物語。熱心な慈善キャンペーンと勇敢な従軍看護婦奉仕などで国家に貢献。彼女は、イギリスの国民から天使の再来と熱狂的に敬愛され、華麗なスター的存在として世を風靡した。彼女は戦後、家柄相応の貴族の青年と結婚したが、やがて不倫と妊娠、流産の噂。間もなく離婚の末失踪して、消息不明になる。世間が事件を忘れた頃ファンの依頼を受けた追跡者が、明け方のロドス島の海辺で彼女が、公爵家子飼いの馬丁男と戯れているのを発見。CONJUGAL AIR (原文)に、衝撃の驚き。「実は、この二人は幼い頃から身分上禁断の愛人関係。遠くロドス島へ逃避行して、人知れず二人で隠棲していたのだ」と言う、モーム持論の人間の本質論。

調査依頼者のファンの男性が、ロンドンのホテルのロビーでこのスキャンダルの報告を聞いて、打ちひしがれる場面から小説は始まる。この小説とテーマを一にする W.S.モームの一連の南海物の名作の数々、小説 RAIN、RED、HONOLULU なども思い出しながら、明るい紺碧のエーゲ海に浮かんで漂う様にゆっくり遊泳した。因みに、RAIN は米ハリウッド映画、リタ・ヘイワース主演の RAIN [邦題：雨に濡れた欲情] (1953)の原作小説。

帰路は、航空機でアテネに戻り、中東のアブダビ、バンコク、香港経由で成田空港に帰着。土産は、バンコク空港で長女用に買った純金のネックレスのみ。こうして、ヨーロッパ視察旅行を慌ただしく終えた。

帰国後 2,3 年経った頃、志賀巖副院長から「新院長の意を汲んだ石川浩一先生（関東労災病院長）が人事に介入、互に警戒、用心する必要が有る」と言う主旨の含蓄ある警告を頂いた。志賀先生も前年、ロシア、東欧の視察旅行から帰国したばかり。この青天の霹靂情報に、びっくり仰天。公明正大な先生と、慈父の如き大先生。この両先生に甘えて、職場に呑気に安住、長居し過ぎた事に気が付いた。仕事に熱中して世事に疎く、無頓着だったことを反省した。

昭和 59 年秋、長年京都で独居中の老母が重態になったことを口実に、潔さぎよく東京労災病院を自ら辞職することを決意。30 年ぶりに一家全員で京都へ帰郷した。母は、1 年半後の昭和 61 年 (1986)、春の彼岸の中日に他界。この後も、身辺に悲しい別離（別れ）が続いた。

約 2 年後の昭和 63 年(1988)8 月、近藤駿四郎先生が高齢のため逝去。私の心情、東京帝国大学第 1 外科開祖の近藤次繁先生の御曹司、近藤駿四郎先生の警咳に接し、10 年余の長きに亘り力及ばず乍ら、直接師事した唯一無二、直系の真の弟子は東京大学第 1 外科でこの私だけである。更に翌年、志賀巖副院長が東京築地の国立癌センター病院で肺癌の手術を受けて間もなく、気管支縫合不全のため容態が急変し、数日後に急逝。手術の怖さを実感した。手術に臨む外科医の重責を痛感した。

[東大第 1 外科森岡恭彦(昭 3 1)教授時代]

平成 26 年(2014)の春、日本外科学会総会が京都で開催された時、私も長女を伴って久しぶりに東京大学第一外科の懇親会に参加してみた。石川浩一(昭 14)、武藤徹一郎(昭 38)の両名誉教授とも、久しぶりに会って歓談した。話題は東大病院に 8 年間勤務して、職場のスター的存在だった私の妻の江崎(菱本)桂子(元東京大学文部技官)の思い出話で持ち切りだった。

この懇親会の土産話が、彼女の 50 年来の懐旧心を駆り立てたのだろうか? 彼女は翌年、平成 27 年(2015)の暮れ、急に思い立ったように石川浩一先生に伏見人形を贈った。知る人ぞ知る、先生は郷土人形の熱心な収集家だった。京都の伏見稲荷大社の近くに「丹嘉」と言う伏見人形の工房がある。伝統の土人形を作る唯一の窯元、江戸の中期、270 年前の寛延年間創業の老舗。彼女はその窯元 8 代目の名工大西貞之師を訪ね、翌年の干支人形を特注して石川先生に贈呈した。先生からは、丁寧な肉筆の礼状をいただいた。

平成 28 年(2016)の正月、石川浩一先生の年賀状にはこの可愛い申(サル)年の干支人形が印刷されていた。それが、先生からの最後の便りになった。この年の 1 月 12 日、高齢のため逝去。行年 100 歳だった。慎みて、石川浩一、近藤駿四郎、志賀巖、三先生の菩提を弔い、ご冥福を祈ります。 南無阿弥陀仏 南無阿弥陀仏 [東大 1 外科渡邊聡明(昭 60)教授時代]

[奈良春日病院外科]

昭和 59 年(1984)の秋、縁有って私が入職した奈良春日病院は奈良県下で最大のベッド数を誇る法人系の一般病院。奈良春日連峰の南端、高円山(高円宮家名由来の地)の麓、光仁天皇田原東陵(奈良時代最後の天皇陵)に近く、奈良市内を広く展望できる奈良市鹿野園町の高台にある。昭和 54 年(1979)に、近くの此瀬町の茶畑から偶然古事記の編纂者、太安万侶(おのやすまろ)の墓碑と骨壺が出土した。歴史の古い〈やまとし まほろば〉の地。

この奈良の鹿野園(ろくやおん)は、奈良仏教の 5 大聖地。ブツダが初めて仏法を説いたサルナートの漢語訳。聖武天皇の大仏開眼法要の導師、婆羅門僧の菩提遷那の命名と言われる古い由緒ある所である。京都の伏見桃山の実家から電車、バスを乗り継いで片道 2 時間。齢(よわい)49 歳にして、ここでようやく世間なみの給与・手当を頂ける事になった。〈捨てる神あれば、拾う神あり〉 私にも一家を養う義務と責任がある。この病院へ常勤で 36 年間通勤した(名誉副院長)。

奈良春日病院の院長、久富充廣先生は昭和 20 年生まれ、大阪大学医学部を卒業(昭 46)。阪大第 2 外科(陣内外科)出身の外科医。この先生と一緒に経験したレーザー手術の件数は、400 件を超える。労災病院の症例と合わせると、合計 1000 余例。その半数は、従来の鋼刃メス、電気メスを使用せずに、レーザーメス単独でおこなった手術である。

また、遠赤外線CO₂レーザー照射の生物物理学的効果について、レーザー物理学者 R. J. Rockwell 博士との共同研究を継承。実験を繰り返して、①生体にレーザーを照射した時のパワー密度、照射時間、温度上昇の相関と、②レーザーで生体を切開した時のパワー密度、切開速度、切開深度の相関を対数・対数グラフ上で解析し、実験的、理論的に函数式で表す事に成功した。

[CO₂レーザー照射の生物物理学的解析 (1) 第13回日本レーザー医学会大会論文集 pp317-320、(1992)]

[CO₂レーザー照射の生物物理学的解析 (2) 第15回日本レーザー医学会大会論文集 pp69-72、(1994)]

日本レーザー医学会、日本臨床外科学会ほか多数の学会総会（旭川、札幌、仙台、東京、横浜、名古屋、金沢、大阪、徳島、広島、久留米、熊本、鹿児島）で、臨床手術の成績、生物物理学的研究の成果、レーザー防御・安全対策などについての発表。計らずも、日本レーザー医学会から学会認定指導医の第1号（No.0001）を授与された。長年に渡り、ささやかながら我が国のレーザー医学をリードして来た私への、学会からの無言のご褒美だと心得ている。

また、米シンシナティ大学主催の<CO₂とNd-YAGレーザーの臨床応用とワークショップ>と題したセミナーに講師として招聘された(昭和59年：1984)。小雪がちらつく師走、10数年ぶりにレーザー研究所の昔の仲間たちと抱き合って感激の再会。大阪国際空港から成田経由でホノルル、シアトル、シカゴ、シンシナティ、ロサンジェルス、ホノルル、羽田空港とゆっくり周遊して帰国した。

数年後、世紀末にカリフォルニア州サンディエゴの合衆国海軍VA病院から突然届いたゴールドマン教授の手紙には、レーザー医学の研究について先生の変わらぬ情熱と抱負が述べられていた。転地療養で入院中の便り？ 手紙は、〈ここは地上のパラダイス〉と結ばれていた。先生は1990年代初頭に、故郷のオハイオ州シンシナティで高齢のため逝去。あの手紙は、先生からの遺言状だったのだと、ずっと後年になってようやく気が付いた。

奈良春日病院の職場旅行では、香港、マカオ、台北、ソウル、ホノルル、サイパン島、テニアン島、グアム島などを歴訪した。サイパン島のバンザイ岬では、海に向かって断崖に立つ多数の卒塔婆、供養塔。グアム島では、横井庄一陸軍軍曹が長年潜んでいた洞穴、道端や洞窟内に寂しく立つ観音像と石仏群、火山岩を積み並べたチャモロ族の伝統的な祭礼場も見た。

サイパン島からテニアン島へは、小型セスナ機で僅か数分のフライト。テニアン島では、原爆を搭載した米B29爆撃機が日本へ出撃したエーブル滑走路跡（ノースフィールド基地）、原爆（リトルボーイとファットマン）を地下の格納庫から爆撃機弾倉に釣り上げ搭載した2か所

の地下壕・ピット跡（石棺型のコンクリート製格納庫）等々を目撃した。テナアン島を真っ直ぐ南北に貫く、ブロードウェイと呼ばれる幅広く、雑草むす一条の大滑走路跡。サイパン、グアム、テナアンなど南太平洋の北マリアナ諸島の島々では、戦前戦中の日本人の建物、住居、街路跡。原野に打ち捨てられて錆びついた戦車、大砲の残骸などが草木に覆われて、虚しく散在していた。何れも、忘れ得ぬ大東亜戦争の戦跡、〈つわもの共が夢の跡〉である。

さらに、勤務先の海外旅行には上記の加えて、上海、バリ島、シンガポール、韓国（北緯 38 度軍事境界線見学ほか）などへのツアーもあった。行かなかったことに悔いが残る。勤務の日程で、行けなかった旅行も少なくない。

[満洲への感傷旅行]

平成 13 年(2001)の晩夏、戦中、戦後の苦難の学童期を共にした国民学校の同級生と連れ立って訪中し、満洲を広く旅行した。吉林省の長春（旧新京）と吉林、北の黒龍江省ハルビン（旧浜江省哈爾濱）、南の遼寧省瀋陽（旧奉天省奉天）などを漫遊した。さらに北京から、河北省の承德（清朝皇帝の有名な避暑地、旧熱河省）方面へ足を伸ばした旅行組もあった。

まず、空路で東京から北京経由、吉林空港着。ぼくを除く 12 名全員が、生まれも育ちも満洲。中国語の日常会話を何とか話せたのは、ぼくだけだった。随行の中国人青年ガイドが、「お客さんに通訳代わりをさせてしまった」、「この人は、ぼくの恐い監視役。本社へ帰ったらまた報告される」と、冗談半分のように呟いた。連れのおばさんガイドのくだけた日本語は、並外れて達者で流暢。中国人旅行団に随行し東京、大阪などへも行ったことがあると言っていた。昔の満人にしては若すぎる。前歴、素性が気になった。

旅の一行は、50 数年ぶりにやっと生まれ故郷に帰れたと歓喜していた。古里に帰って来たとなつかしがついて涙ぐんでいる女子もいてびっくりした。こんな異郷の地が故郷だなんて？（ぼくの驚き、とっさの感想）瀋陽では、特急アジア号の残骸機関車の運転席によじ登って嬉々として窓越しに手を振る男子たち。まるでみんな、小学生に戻ったみたいだった。

一方、満洲事変の発端地、柳条湖の 9/18 歴史記念館（抗日・反日の展示場）では、無然、悄然と無言で足早に退場する者が多かった。最後までゆっくりと参観したのは、僕と同行の潮田陸奥男君の二人だけだった。残念ながら、柳条湖鉄道爆破の現場に立つことは叶わなかった。

柳条湖事件は昭和 6 年 9 月 18 日、満洲駐屯の関東軍（日本軍）が奉天（現瀋陽）郊外の柳条湖で南満洲鉄道を爆破した事件。日本軍は爆破を「支那軍の犯行」と主張して、満洲全土を軍事占領。清朝最後の皇帝・宣統帝、即ち愛新覚羅溥儀を新皇帝（康德帝）とする「大満洲帝國」

を建国した。中国共産党政府は、これを偽（傀儡）満州国、偽皇帝と呼んでいる。

ぼく達一行は、吉林在満朝日国民学校（現在、吉林第1鉄路中学）を半世紀ぶりに訪問。西暦3世紀頃の高句麗古城遺跡（吉林）、北山公園（吉林）、松花江の豊満湖、豊満ダム（吉林）、満洲国皇帝/康德帝（溥儀）の皇宮、関東軍大本営跡（長春）、大清帝国の第1代皇帝/天命帝（ヌルハチ）と第2代皇帝/崇徳帝（ホルタイジ）の巨大な陵墓、満洲軍閥・張作霖の旧邸跡記念館（瀋陽）などを巡回。さらに満洲映画（満映）撮影所跡（長春）、各地の古い歴史的文廟（孔子廟）、ロシア正教会の聖ソフィア大聖堂（ハルビン）などを巡った。初めて訪ねる珍しい満洲の名所旧跡巡り。滅多に体験できない、素晴らしい満洲旅行だった。

東京から空路、北京経由で吉林へ。吉林からバスで東の長春へ。夜行列車で北のハルビンへ。長距離列車で南の瀋陽へ。瀋陽から空路で北京に着いて、天安門広場近くのホテルに一泊。鉄路の北京駅構内と駅前広場には、数百人の群衆が土間で野宿していた。我々一行は翌日の航空便で、元気に成田空港に帰還した。念願の旅順の日露戦争古戦場跡、日本陸軍第3軍司令部跡、激戦の203高地、乃木大将・ステッセル将軍会見の水師營、アカシアの大連、集安市（吉林省）にある高句麗時代の好太王碑（広開土王碑）などへ行けなかったのは、生涯の心残りである。

遠い昔、少年時代にぼく達が吉林で泳いだ大河、松花江。ハルビンでは河幅が何倍も広く、滔々と流れていた。この河は、ほどなく中露国境で下流の黒竜江（アムール川）に合流する。おりから、松花江大橋をロシア・シベリア行きの列車が汽笛を鳴らして通過した。ぼく達は、遙か遠く満洲の曠野、地平線の彼方に沈み行く大きく、赤い夕日を無言でじっと眺めていた。

皆さんは、あの有名な軍歌「戦友」の歌詞をご存知？ 昔は、誰もが知っていたあの懐かしい歌（歌詞全14番。明治38年/1907）。<ここは御国の何百里、離れて遠き満洲の赤い夕陽に照らされて、友は野末の石の下> 日露戦争、遼東半島激戦地の勇ましくも悲しい唱歌（眞下飛泉作詞、三善和気作曲）。この歌詞を刻んだ巨石の歌碑が、京都東山の浄土宗総本山、知恩院境内にある塔中寺院、良正院の門前右奥に人知れずひっそりと今も建っている。

ハルビンの日本料理屋の前に、珍しく和服姿の看板娘が立っていたので、「穿着那樣衣服、日本人小姐麼？ 是不是？」と声掛けしたところ、慌てて「不、不是」、「不、不对」と首を横に振った。ハルビンの目抜き通り、ロシア風のキタイスカヤ街（中央大街）は美味しいロシア料理を満喫した。

北のロシアと国境を接する町、内蒙古の満州里から遙か遠く離れた南方の山西省漢口、湖北省の武漢方面へ2日半もかけて直行する列車が有って旅愁に誘われた。ぼく達が、ハルビンから

長春、(公主嶺)、(四平街)、(鉄嶺)を經由し、瀋陽まで乗ったのが、まさにこの長距離列車(註:括弧内は、特急通過主要駅)。中国大陸の広大さを改めて認識した。この満洲旅行は、「中国人1年分の生活費を、僅か2週間で費やした」と、ガイドが指摘するほど贅沢で、豪華な大名旅行だった。なお、この旅行と相前後して、われら第一外科の東大名誉教授(昭20)草間悟先生の訃報を知った。ここに改めて先生の菩提を弔い、ご冥福をお祈りします。

[東京大学第1外科名川弘一(昭55)教授時代]

あの満洲旅行から20余年の歳月が流れ、連絡がつく同行の仲間は今や只一人きり。最近、埼玉県の越谷から京都の自宅へ電話があった。知人が多く、消息通の太田智子さんも体調不良で、施設入りして連絡途絶。認知症(推定)、難聴、老衰・病没(最多)などのため、連絡が途絶えた友人たちが多し。数十年ぶりに吉林の地を踏んで、「やっと故里に帰れた」と、あんなに喜んでいた学友たちが、間もなく一人も居なくなりそう。音も立てず足早に、秋の疾風のように過ぎ去る歳月の流れが恐ろしく、恨めしい。

[中医内科医、魯麗サンとの邂逅]

この旅行中、吉林市内を流れる松花江の対岸、竜潭区の街外れで偶然出会った中医内科の女大夫(女医)、魯麗女士の自宅へ一行は案内された。妹らしい若い女性と男の子(男孩子)がついて来た。初めに目ざとく、我々旅の一行を見つけたのはこの親子だった。魯麗女士は、古い日本人の住宅をリフォームした家屋に仔猫と一緒に住んでいた。机、本棚とベッドの居間兼寝室と、土間の台所。小奇麗ながら質素な中国人の伝統的住まい。本棚には、循環器関連の中国医学の参考書が数冊並んでいた。

長春にある中医専門大学を卒業。(中医:中国医学、漢方医学) 学校で日本語を学習したことが有る(在学学校学過日語)と言っていたが、会話は終始、早口の中国語だった(只說得太快漢語)。この魯麗さんとは、その後も手紙(信)と贈り物(礼物)交換で交流している。手紙は、相互に中文(中国語)/日文(日本語)。互いに中国語、日本語の勉強になり(学外語互相很用功)、面白くて役に立つ(又很有意思的、又非常方便的)。

今年9月末、魯麗さんから久しぶりに便りが届いた。「30年間働いた吉林の竜潭中医病院の主任を5年前に55歳で退職(退休)。その後、北京と上海での短期勤務を経て、今年の3月に浙江省杭州市西湖区にある方回春堂国医館中医診療部へ転職した。西暦1649年創建の古く伝統ある職場に勤務出来てうれしい」と言う内容の巧みな日本語文の手紙。因みに、杭州の西湖は世界遺産、中国の4大景勝地の一つである。わが家の居間にも杭州西湖の南宋風の絢爛豪華な、美しい四曲の金衝立を飾っている。

二十二年前の平成13年晩夏、吉林省吉林市竜潭区の松花江対岸で巡り合った時は、年齢38歳と言っていた。「光陰矢の如し」（光陰如箭）である。また唐代の詩人、劉希夷の有名な漢詩から、「年年歳歳花相似たり、歳歳年々人同じからず」（年年歳歳花相似、歳歳年々人不同）。

〔妻の死と私の引退〕

五年前の平成30年(2018)1月31日、九歳年下の私の妻、菱本（旧姓江崎）桂子が、突然悪性リンパ腫で他界した。第11/14番染色体転座による悪性濾胞性リンパ腫（FL）であった。発見時、すでに急性ショック状態。京都医療センターに救急入院したが、心肺不全、脳幹不全と、DIC、多臓器不全のため、意識が戻らないまま急死した。後腹膜の第2腰椎の前方にある乳糜槽（CYSTERNA CHYLI）が腫瘍のために閉塞し、全身のリンパ循環が破綻したものと推定される。（乳糜槽は、血液循環の心臓に相当するリンパ循環系の重要な中枢臓器）

二十数年も前から、時々「下肢が何となく硬く、張っている」という訴えがあった。下肢のCT検査では、軽度の瀰漫性の皮下リンパ浮腫が認められるのみ。末梢血検査で、ごく稀に少数の異形リンパ細胞が見られるとの指摘があった。気に留めず放置していたことが悔やまれる。何もしてあげられなかった。思い出すたびに、残念で涙が止まらない。

突然、空しく妻を亡くした私は翌年の令和元年(2019)の夏、36年間常勤で勤続した奈良春日病院を85歳で退職した。自宅の庭に、記念樹として次世代のソメイヨシノと言われる〔神代あけぼの〕と言う名の新種の桜と、春秋2度咲きの〔十月桜〕の株を移植した。在りし日の彼女を偲び、根本の石仏に手を合わせて供養している。

奈良春日病院には、その後ご無沙汰することまる5年。最近久しぶりに電話で、自分の心電図検査、CT検査、超音波検査、骨密度検査などを予約した。近日中に受診予定になっている。

〔私の近況〕

現在、両親が遺した伏見桃山の古い寓居で、独り侘しく余生を過ごしている。いわゆる独居老人。庭の四季の手入れもキツイ日課。庭仕事は、綺麗ごとのガーデニングではない。厳しい労働の土木作業。飛び石、置石、灯籠、つくばえ、石仏の移動なども大変な力仕事。草木の植え替え、剪定、落ち葉拾い。除草、害虫駆除、散水など日常の手入れも老躯には相当こたえる。わが家の庭には一木一草一石に至るまで、年余の労苦の汗が染み込んでいる。

最近、時間の合間にU-チューブでモーツァルトやショパンなどの古典アルバムに加え、露和辞典を紐解きながら、ロシアの作曲家Сергей Чекалин（セルゲイ・チェカリン）、Сергей Гришук（セルゲイ・グリシチュク）、Павел Ружицкий

(パーベル・ルジツキー)、Андрей Обидин (アンドレイ・オビデイン) たちの、魂のリラックス音楽 (Релакс Музыка Для Души) や、魂の愛の音楽 (Музыка Любви Для Души) の切ない哀愁のメロディーで、傷つき疲れた心と体を静かに癒やしている。回想的で世にも妙なる、美しい鎮魂の名曲の数々。ロシアの音楽に、こんなにも慰められるとは！

なお、昭和 23 年から 70 年以上も続けてきたラジオ中国語講座の学習は中止した。大した進歩は、今さら望むべきもない。老い先短い自分には、もう意味がないことに気がついた。

[終わりに]

昭和 8 年(1933)生まれの卒寿。今年の 12 月 29 日には上皇陛下 (平成天皇) に 6 日遅れて、満 90 歳になる。昭和 34 年(1958)に、東京大学第 1 外科と一緒に入局した 6 人の同僚中、4 人がすでに他界。存命者は、私と金沢暁太郎君(自治医大名誉教授)と 2 人だけ。金沢先生への今年の年賀状には、「とうとう、2 人だけになってしまいましたね」と添書きした。次の東京大学第 1 外科開講 140 周年記念 (令和 15、2033) には、私たちは白寿の 100 歳。互いに、記念会を元気に祝えるよう祈願する。

因みに、裏千家の千玄室宗匠 (千宗室元家元) は、満百歳の献茶式を令和 5 年 6 月にオーストラリアで催し、9 月にも国連本部で世界平和を祈念して茶会を主催。この元気な百寿パワーにあやかりたいものである。なお、千玄室翁は神風特攻隊員の最年長、最後の生き残りと聞く (神風特別攻撃隊白菊隊)。

[果てしなき旅路へ]

最後に、私の積年の宿願である地球一周の船旅の夢について、目下の予定航路をひと言追加。神戸を出港して上海、シンガポール、コーチン (印度)、スエズ運河、サファガ (エジプト)、ポートサイド、サントリーニ島、ピレウス、バレッタ (マルタ)、チュニス (チュニジア)、チビタベッキア (イタリア)、マルセーユ、バルセロナ、リスボン、リバプール、レイキャビック (アイスランド)、ニューヨーク、クリストバル (パナマ)、パナマ運河、カヤオ (ペルー)、イースター島 (ペルー)、パペーテ (タヒチ島)、ホノルル (オアフ島)、ナヴィリヴィリ (カウアイ島) などを巡り、横浜、神戸に帰還するまで 3 ヶ月の地球一周クルーズ。

この船旅計画が、「見果てぬ幻の夢旅行」に終わらないよう祈念している。長距離、長時間の航海は、体力と年齢が最大の難関。航海中に不幸にも、身はわだつみの水漬く屍となっても厭わない。顧みはせずの覚悟である。

最後の最終旅行は、究極転生の永遠の旅路への旅立ち。壮大にして無窮なる大宇宙の遥か彼方、蒼穹の百三十八億四千大千世界への果てしなき大飛翔。いつの日か、この世にふたたび帰り得ぬ永劫、無量寿の知られざる冥界の果て、時空を超えたあの世への旅立ち。

永遠（とわ）の別れ。永久にサヨウナラ！

[ご精読ご苦労様でした]

皆々様、長い間お世話になりました。本当に有難うございました。

いつの日か、この命尽きるその日まで、頑張ります。では、ごきげんよう。

[令和5年12月 京都市の自宅 幾久庵にて 菱本久美郎]

[写真集]

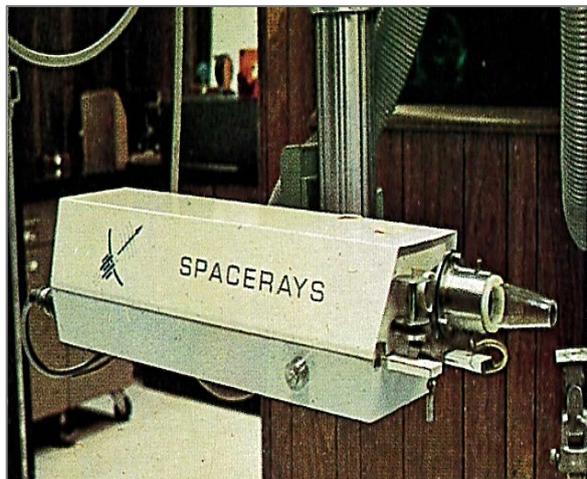


FIG1 スペースレイズ社治療用ルビーレーザー (米)

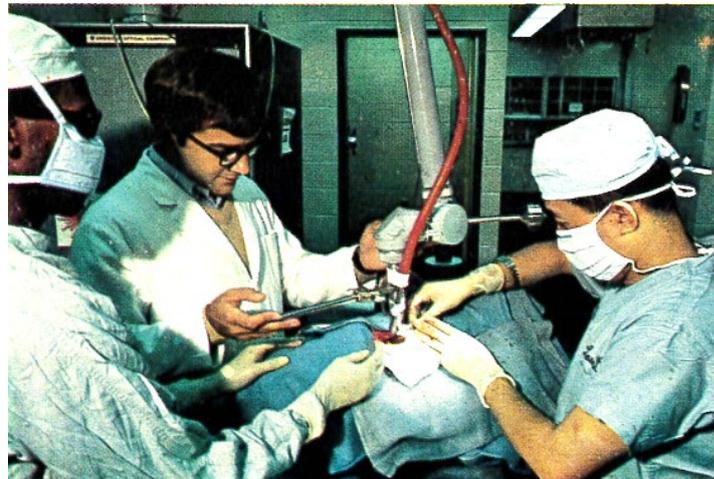


FIG2 シャープブラン社CO2レーザー (米、筆者)



FIG3 アロカ社製CO2レーザーメス (日本)



FIG4 遠赤外線CO2レーザー手術 モデル (筆者)

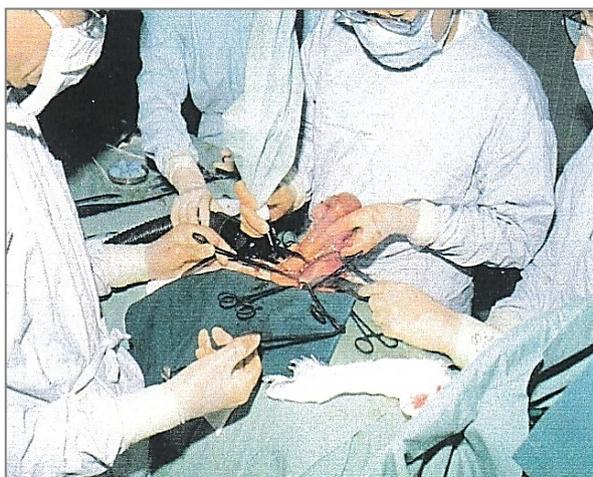


FIG5 レーザ手術 (黒色手術器械と防御眼鏡)

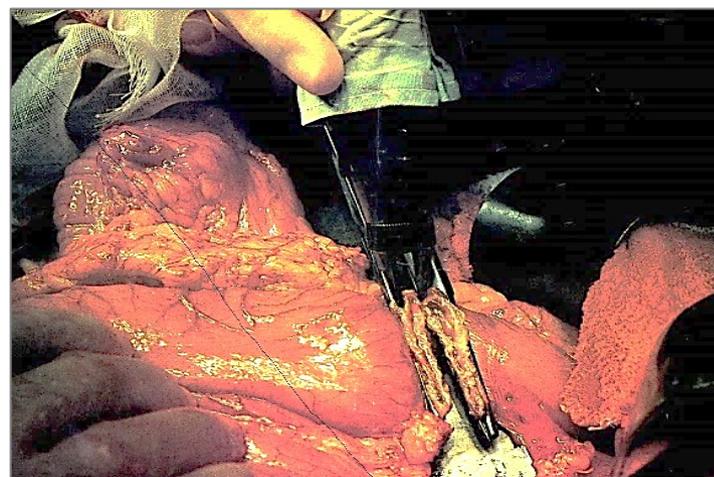


FIG6 CO2レーザー手術 接写供覧 (術者・筆者)